

小樽市立稲穂小学校

指定年度：H25～

児童数：393名

1 包括的な学校改善に向けた取組の概要

勤勉に頑張る反面、相手意識をもった集団生活に課題がある児童や、保護者の協力体制の二極化の実態を踏まえ、校長の力量はもとより、教職員の集団としての力量を高めるため、「校長のリーダーシップ」「協働体制」「コミュニケーション」「人材育成」に取り組んだ。

①校長のリーダーシップ

- 子どもたちが進む未来の社会を踏まえた「経営ビジョン」や「年度の重点」を子どもの姿で分かりやすい言葉で示し、子どもの姿で成果と課題を共有、検証改善することを重視した。
- 「校務運営規程」を定め、学校の意思決定を明確にするとともに、組織を動かし、ミドルリーダーに役割と出番、責任を与えることをシステム化した。
- 「働き方改革」の目的を「子どもに必要な資質・能力を身に付けさせる、という責務を果たすため」と明確に示し「働き方改革推進委員会」を設置し、全教職員で取組を進めた。

②協働体制

- 学校の本来の目的を共有した上で、「業務効率化マニュアル」により、組織の一員としての仕事の仕方を全員に周知し、常に、このマニュアルに立ち返るようにした。
- 授業の基盤となる「温かい学級づくり」に向け、校内研修で共有したことを全教室の後方に掲示し、全教職員が常に意識して取り組めるようにした。

③コミュニケーション

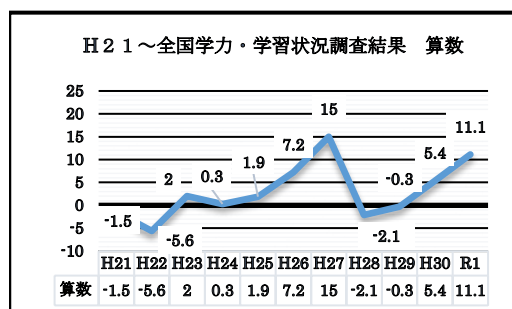
- 「立ち話コーナー」を設置し、教頭を中心に、「いつでも、誰に対しても、話しやすい、相談しやすい温かい職員室づくり」に努めた。
- 先輩教員が失敗談を伝えるなど、若手教員が学ぶ機会を意図的に設定することにより、先輩教員も若手の手本となるよう自ら学ぶなど、学び合う風土を醸成した。

④人材育成

- 教員育成指標に基づく自己評価を行い、校長との面談で継続的に活用した。
- 個々の得意を生かすミニ研修や、初任段階層職員への計画的な OJT を実施した。



2 取組の成果と課題（□：成果 ■：課題）



□子どもたちの学習規律の徹底や習熟度別指導、専科指導により、全国学力・学習状況調査の平均正答率の上昇が見られたほか、他教科においても標準学力検査やチャレンジテスト等で成果がみられた。

□教科担任制の導入により、「算数、理科が好き」や「授業がよく分かる」と回答した児童の割合が高くなり、子どもの学びの質の向上が見られた。

■どの先生が授業を行っても、学びの質が下がることのないよう、安定した温かい雰囲気 of 学級経営を大切にする必要がある。